

は　じ　め　に

このたび、増田芳雄先生のご退職を機に、帝塚山学園人間環境科学研究所紀要「人間環境科学」別冊を刊行することになった。現在たまたま所長の任にある者として、ひとこと申し述べたい。

本年三月、増田芳雄先生は帝塚山学園(短期大学)を定年退職された。定年制度を基盤とするわが国にあっては避けられないこととはいえ、至極残念なことである。

先生は、大阪市立大学理学部教授を永く勤められた後、本学園短期大学教授として七年間ご活躍された。この間の、多方面にわたる数々の業績についてはここで改めて申すまでもないが、私たち研究所所員としては、人間環境科学研究所における先生の格別のご功績に対し心から敬意を表したい。先生は、本研究所の創設に尽力され、草創期の二期四年間、所長として研究所の基礎を築かれた。そしてその後も、講演会活動、紀要への投稿などで研究所の中心的役割を果たされている。先生の存在は、単に対外的に研究所の格を高からしめるのみならず、内にあっては私たち後続く研究者にとっての大きな心の支えでもある。そして形の上で学園を去られることになったいま、研究所所員の間から何か先生にお応えできることはないだろうか、という声があがってきたのも驚くに当たらない。そこで、先生ご自身のご希望もあって、先生がこれまで書いてこられた膨大な文の中から何篇かを先生に選んでいただき、研究所紀要別冊としてまとめることになった次第である。

増田先生の博識ぶりはつとに有名である。この博識は、私が愚考するまでもなく、あらゆるものごとに対する先生の旺盛な知的好奇心に由来するものであろう。これまで本研究所の紀要に掲載された先生の論文をご覧いただきたい。先生の物される学術論文は専門の植物生理学の分野にのみとどまるものではない。否、それどころか先生の学問的興味は自然科学の枠をも越えて広く芸術、文化、歴史の分野に及び、また、わが国の大学教育のありようについても(批判を込めた)鋭い分析をしておられる。先生のこのような態度は、専門分野の異なる者に対しても研究者のとるべき道を静かに教えて下さっている。とまれ本学園で先生とご縁ができたということは、私のような若輩者にとって、またとない僥倖であった。

まったく個人的感想で恐縮ではあるが、パソコンを使った整理術が喧伝される昨今、先生にはこのようなテクニックは必要ないのではないかと忖察している。膨大な量の情報は先生ご自身の頭の中にきちんと整理されて格納されており、必要なときにはいつでも、必要な部分を必要な形に組織化して取り出すというすべをご自身でお持ちだからである。先生にとってはおそらく、あたりまえのことなのであろうが、私のような凡人から見るとこのような才能は羨望の対象以外の何物でもない。とにかく、先生の頭の中から取り出された情報はタテヨコに組み合わせられ、格調高い文体と相まって素晴らしい文が編み出されてゆく。このように生み出された先生の文のいくつかをここにご紹介できることは、私にとって大いなる喜びである。また告白すれば、私自身これらをかすかな知的興奮を持って読み進めるであろうと予感している。

さて、増田先生は、帝塚山学園を定年退職されたが、人間環境科学研究所には客員研究員として引き続き残っていただけることになった。所長の任にある私にとっても誠に心強く喜びに耐えない。

末筆ながら、先生のこれからの益々のご健康を心からお祈りするとともに、あつかましくも、これから先も私たち若手(?)研究者にご指導ご鞭撻をいただけることを願っている。

1998年6月

帝塚山学園人間環境科学研究所所長
安井伸郎